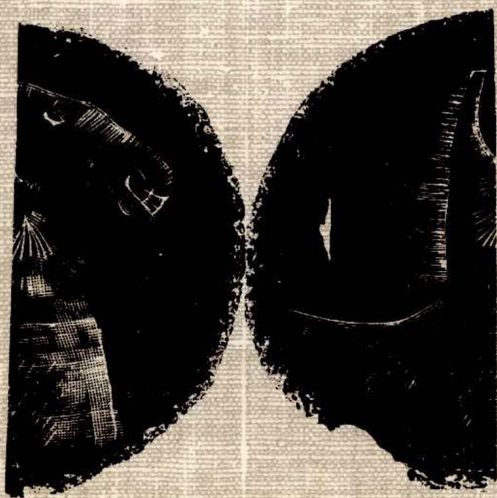




270047



日文 701721583

丸谷才一対談集
古典それから現代



構想社



対談集 古典それから現代

一九七八年五月二〇日第一刷発行

定価一〇〇〇円

著者代表 丸谷才一

発行者 坂本一亀

発行所 株式会社 構想社

東京都千代田区神田錦町三ノ六

〒100 電話(三三)五五七六

振替口座(東京)一五九七

印刷所 新陽印刷

製本所 小泉製本

(落・乱丁本はお取替えいたします)

丸谷才一対談集・古典それから現代・目次

日本文学史とわたし

岩松研吉郎

6

宮廷文化としての和歌

久保田 淳

38

日本文化史の謎

司馬遼太郎

58

*

唱和と即興

大岡 信

90

折口信夫を中心にして

岡野弘彦

122

「明星」の詩と短歌

堀口大樹

162

*

文学と実生活

平野 謙

184

文庫文化の過去と未来

谷沢 永一

219

あとがき

232

初出一覧

234

菱
幘
司

修

対談集

古典それから現代

日本文学史とわたし

岩松研吉郎
丸谷才一

文学史の新たな視点を

丸谷 専門が中世和歌なんですか？

岩松 はい、『新古今』より少しくだって、鎌倉の後期くらいです。

丸谷 そうすると『玉葉』『風雅』のへんですか。

岩松 そうですね、『風雅集』までは調べておりません。大体『玉葉集』までです。

丸谷 それはいいですね。勉強のしがいがある。あのへんは、未開拓の原野みたいなものでしょう。
岩松 テキストそのものが整備されていませんし……。

丸谷 そうですね。

岩松 勅撰集というものが、勅撰集であるがゆえにと言うか、いわゆる「実証」的な検討すらされていませんね。

丸谷 そうなんですよ。要するに日本文学の一番のエッセンスは、「二十一代集」だというのがぼくの持論なんですけどね。でも、「二十一代集」が日本文学の中の一番重要な部分だと言ったら、間違い扱いされるんじゃないかな。

岩松 そうですね、文学史の上でいわゆる国文学者でも、かならずしもそうは言わない。

丸谷 言わないでしょう。要するに『古事記』『万葉』『源氏』それから……。

岩松 説話文学などと続けます。

丸谷 軍記物とか、それからあとは飛んで芭蕉、そんなのが大事であって、しかたがないから義理立てして『古今』と『新古今』はちょっと重視する。「二十一代集」が日本文学史をつかまえるのに一番肝要な部分だということは、まだ考えられていないわけですよ。

岩松 そうですね、岩波の『日本古典文学大系』などのシリーズでも、勅撰集は結局『古今集』と『新古今集』だけという形がずっと続いています。

丸谷 そうそう。みんながそれを当然のこととして疑わないわけですよ。こういう常識は、一体なぜ出来あがったのかということになると、応仁の乱の直前で勅撰集は終った。それで、応仁の乱以後、日本はまったく変っちゃったと思うんです。それで、変る前の日本文学の価値体系が、まず一べんわからなくなっちゃった。それが一つ。そしてその次に今度は明治維新でもう一べんわからなくなかった。その二つの激変があったものだから、何がなんだかわけのわからない、不可解な、つまり、無価値なものとして「二十一代集」をつかまえていると思うんですね。

岩松 そうしますと、勅撰集を文学の正統からはずしてしまおうというのは、たとえば正岡子規以来

という言い方も、よくされるわけですが、もう少し、文化史的な広がり背景として生じたことだというふうにお考えになるわけですか。

丸谷 もちろん子規のやったこと、これは非常に破壊的な行動ですよ。あの人、そういうことをさせるとうまいですからね。むちゃくちゃにうまいから、息の根をとめちゃったわけでしょう。しかし、子規という人はたいへんジャーナリスティックな才能のあった人で、時代の気運を察していた。勅撰集を否定することが、いま要求されていると思ったから、そのことを敢行したわけですよ。でも、勅撰集否定が要求されたのは、単に明治維新だけで生じた気運じゃなくて、その前から、ずっと、何百年もかかって育てられていたものだろうと思いますね。

岩松 丸谷さんは『後鳥羽院』の中で、連歌師たちの注で、『新古今集』あるいは後鳥羽院の歌を読むべきであるというふうにお書きになったわけですが、その連歌師たちは歌というものをずっと尊重し続けて、それが、大きな変化はあったにしろ、いちおう文学の脈絡としては、俳諧を通じて、江戸時代の文学にも流れ込んで行くということは言えると思います。そういった連歌、俳諧への流れについては、そういう中で、どのようにお考えですか。

丸谷 そこは二重の仕組みになっていましたね。勅撰集に対する否定がじわじわと進んで行ったというのが一方にあって、しかし、なおかつ一方に勅撰集に対する尊敬、崇拜が、ずっと明治維新までつらなっていたということが一方にあると思うんです。で、その否定のほうの方向を極端に発動して、肯定のほう、尊敬のほうの方向の息の根をとめてしまったのが子規だろうと思うわけですよ。ですから、私の日本文学史の見通しで言いますとね、結局『古今集』以前が日本文学史の第一

期。これは『万葉』とか、それから勅撰詩文集。『万葉集』も一種の勅撰集であったのかもしれないという説があるでしょう。

岩松 少なくとも、部分的には勅撰のものを含むだろうという考えがあります。

丸谷 あれが、最近非常に有力な立場らしいんだけど、事実そう考えると、非常にうまくゆくところがありますよね。ですから、『万葉』や勅撰三詩文集のああいふ時代、これが日本文学史の第一期で、宮廷文学の準備期なんです。それから次に、『古今』から『新古今』までの「八代集」の時代、これを第二期と考える。これは宮廷文学の全盛期。『源氏』も『枕草子』も『大鏡』も『梁塵秘抄』もみなこれにはいる。それから「十三代集」の時代ですね、それを第三期、つまり宮廷文学の衰弱期と考えて、第四期というのが「二十一代集」を終ったとき、つまり応仁の乱のときからずっと明治時代の末、自然主義の勃興というところまで、これが第四期で、われわれはいま日本文学史の第五の時代にいるんだと思うんですよ。

岩松 ところで、日本の文学史の中での、今度は、散文の役割ということですけども、その第五期以後は、丸谷さんによればゆがんだ形ということになりますが、少なくとも小説が文学の中心であるというふうに考えられてきた。

丸谷 ええ。

岩松 で、近代以前では、たとえば『古今集』に続く時代というのは、同時に、散文が形づくられる時期でもあるわけですね。それから、近世にも様々な散文の作品があるわけですけど、そういうものに關して、丸谷さんはむしろ韻文の方面に比べて、古典については、小説家としての丸谷

さんという、はたからの見方では、散文への論及というのが、わりあい少ないように思えるんですけれども。

丸谷 そうね。一つには不勉強ということですね。それから一つには、ぼくはどうしても人のしないことをする傾向がありましてね。それで日本小説史については、いろんな新しい見解が、かなり出されているという気がするんですよ。つまり、明治維新以前の日本小説史ですね。それはやはり、いまが小説の時代であることの反映なんですけれど、かなりされていると思うんです。ところが、明治維新以前の詩の歴史、ことに中心部を占めていた勅撰集、宮廷の詩としての和歌ですね、それについての言及はほとんどなされていないって感じがするわけですね。だから、そのところをおもしろがってやっているという面があるんですね。ただし『源氏物語』について書いた短い文章はあるんです。『梨のつぶて』の中に入っていますけれども、あれにしても、和歌のレトリックと物語との関連というところに関心を持って書いたつもりなんです。つまり『源氏物語』とブルーストと並べる考え方がよくあるでしょう。ぼくはそれを正しいと思うけれども、ブルーストの例のあいまい詩的なレトリックやイメージですね、それに該当するものが『源氏』の場合は何だったのかということを書きました。それが、要するに『古今集』によく示されている宮廷の詩のレトリックの応用であったというところが、ぼくには興味があったんです。

そういう興味の持ち方というのは、結局、ジョイスの小説におけるイメージ、非常に詩的なイメージにぼくが親しんだせいですね。単に『源氏物語』に限らず、日本の物語にはずうっと、たとえば西鶴なり秋成なりに至るまで、和歌のイメージやレトリックが非常に大きく影をおとしていると

思うんですね。そういうところに、ぼくは興味があった。単なる小説論、リアリズム小説の見方、乃至それに近いもので日本の物語を切ってしまったんでは、日本の物語ではない別のものを論じることになってしまっていると思います。

朔太郎——『新古今』との出会い

岩松 そうすると、自然主義以後の、日本のいわゆる「リアリズム」についての考え方への一つの批評として、特に和歌を中心にした古典への関心というものが、丸谷さんの中で生じてきたということなんです。

丸谷 そのところは、それほどはつきりもしていない。いまになってまとめてみれば、そういう方向でまとめることもできるでしょうよ。でも、ぼく自身で自分のことをいろいろ考えてみると、やはり宮廷の和歌、ことに『新古今』ですね、『新古今』を読んで、非常に気持ちがよかったんですね。

岩松 そこで、いわゆる古典の「経験」というのをお訊きしていくことになるわけですが、『新古今』などを自覚的にそういう形で読み始められたのはいつごろのことなんです。

丸谷 ぼくに『新古今』を初めて教えたのは萩原朔太郎だと思うんですね。中学の終りごろですね。

岩松 そうすると昭和十年代。

丸谷 昭和十年代のかなりあとですよ。

岩松 戦争中ですね。

丸谷 戦争、そうね。河出書房から『現代詩集』という三冊本の白い表紙の詩集が出ましてね、その中のある巻に朔太郎の詩がかなりはいっているんです。ぼくが朔太郎に夢中になったのは、その朔太郎の詩の選集のせいなんです。ほとんどあのときに、ぼくと文学との関係は始まったと言っていると思うですね。その前から文学好きだったんですが、言葉というものがたった一つだけでこういうふうの世界をつくることができるということ、それにはじめてびっくりしたのは、朔太郎の一連の詩を読んだときでしたね。何だか朔太郎の詩が全部よかったんです。それで、朔太郎のものをいろいろ読み始めましてね。『新しき欲情』とか、そういう種類のアフォリズムやなんかも読みましたし、それから『恋愛名歌集』を読みましてね。でも、あのくらいの年ごろというのは何しろ成長が速いから、『恋愛名歌集』を読んだのはかなりあとで、そのころになると、朔太郎に對してかなり批評的になることができるわけですね。

この人の考え方は何かずいぶん変なところがあるよ、という感じがした記憶があります。あるけれども、でも、引いてある和歌は、一々きれいで、それからアララギ的な考え方に対する朔太郎の攻撃は、一々非常にもっともだと思いました。そういう意味で、たいへん感心したり、それから何だかこう粗雑と言うのかな、雑駁と言うのかな、そういう感じを受けたりした記憶があります。で、そのころ朔太郎につられて少し『新古今』を読みました。しかし読んだことは読んだけれども、いくら『新古今』でも玉石混淆でしょう。自分で初めから読んでみると、つまらない歌が多いんですね。それに、学力がないから、わからないでしょう。中学生ですもの、仕方がない。それに、当時の東北の小都市では、『新古今』の注釈書なんて手にはいらないわけですよ。

岩松 あのところは殆どなかったでしようね。

丸谷 ですから、ただ読むだけでしょう。読んでもあまりよくわからなかった。それで、それからのはあったらかして、ずっと『新古今』読まなかったんですよ。で、そのうちにジョイスやエリオットを読んでいて、それでもう一べん『新古今』と出会うんですね。前に読んだのは岩波文庫だったと思いますけれども、今度読んだのはずいぶんあとですよ、岩波の『古典文学大系』で読んだんです。それで、今度はちゃんと注があるし、それから、こっちがジョイスやエリオットで何か身につけた読み方があって、それで注に対しての異論も唱えることができるし、注がないところでは、自分でいろいろ言うことができるし、それから昔の注釈書を参考にして読む手も覚えたり、それやこれやで何とか読むことができたわけですね。

このあいだ亡くなられたけれども、国学院の学長をなさっていた佐藤謙三さんに勉強方法をずいぶんいろいろ相談しました。佐藤さんですよ、本居宣長以降の新注は読んじやいけない、連歌師の注を読めと教えてくださったのは。それが非常にいい方針だったようですね、うまくいったらいいんです。

岩松 そうしますと、少し戻る形になりますけれども、保田與重郎さんとか、その他の「日本浪漫派」の人たちと言いますか、昭和十年代の一種の古典復興……復興と言っているのかどうかわかりませんが……そのなかで古典論、特に『新古今』についてのものも含めて、いろいろなエッセイや何かが書かれたわけですが、そういったものをそのころに直接お読みになって『新古今』へ、というわけではなかったんですね。

丸谷 朔太郎と保田與重郎は関係あるわけですけどね。でも、ぼくが戦前に読んだ保田與重郎というのは、『木曾の冠者』とか『日本の橋』とか、ああいう種類のものだけでしたね。それから『誰ヶ袖屏風』。つまり、ごく初期のものには非常に感心しました。ところが、ごく初期のものを感心している最中に、保田與重郎はどんどん変なものを書いたわけですよ。

岩松 非常に「政治」的になっていった……。

丸谷 それで、そういうあとのものは何がなんだかわからないだよ、もう。すこし読んでやめましてね。そのせいで、ぼくは『後鳥羽院』だって読んだことがなかったんじゃないかと思えますよ。すこし読んだかもしれないけれども、それも読み方がよくわからなくて、たしか途中でやめたんじゃないかという気がします。『戴冠詩人の御一人者』ですか、あれは読んだような気がします、それも感心しなかったなあ。やはりいちばんいいのは『日本の橋』ですよ。

岩松 それは後から読んだ私もそう思います。そこで、朔太郎から『新古今』につながって行ったというのは非常に興味があります。興味があると言いますか、丸谷さんのお書きになったものをずっと読んでいてよくわかるような気がするんです。つまり、詩としての「言葉」というレベルで……『新古今』はそういう言葉のレベルから接近する意味では一等完成度が高いものだと思いますけれども、そういう形で古典につながって行ったのであって、いわゆる伝統のイデオロギーにおいてというようなものではなかったわけですね。

丸谷 政治的イデオロギー的な局面は、まったくなかったですね。ですから、これはぼくの少年時代の好みの問題があるのかもしれませんが、朔太郎がだんだん、おかしくなっていく。そのとき、